

2025 年度 学生コミュニティプロジェクト ギャザリング 実施報告

開催日時	2026 年 1 月 13 日（火）10:00-12:00
会場	オンライン形式
主催	GPAI 東京専門家支援センター

GPAI 東京専門家支援センター（東京センター）では、学生自身が主体となって AI の社会実装事例を調査・分析し、その成果を共有することを通じて、責任ある AI のあり方について考察を深めることを目指し、学生コミュニティプロジェクトを実施している。今般、日本で調査に関わる学生による調査活動の進捗共有と、AI と社会の関係性について分野横断的な議論を行うことを目的として 2026 年 1 月 13 日にギャザリングをオンライン形式で実施した。当日は、江間有沙准教授（東京大学）のプロジェクト参加学生および、中野雅史教授（東洋大学）、藤本昌代教授（同志社大学）、勝野宏史教授（同志社大学）の各ゼミ・研究室に所属する学生（約 30 名）に加え、関係者が参加した。

まず、主催者である東京センターによる開会挨拶および本年度プロジェクトの概要説明が行われ、続いて、原山優子センター長から、GPAI が責任ある AI の開発・活用を推進する国際的枠組みであること、東京センターが専門家支援や現場に根ざした知見の蓄積を通じて国内外の議論に貢献していることについて説明があった。あわせて、本プロジェクトがその一環として学生主体の調査・分析と成果発信を通じ次世代の責任ある AI 人材の育成を目指すものであることが示された。

前半では、3 グループからなる学生代表により、異なる分野における AI 活用に関する調査結果が報告された。同志社大学勝野ゼミの田村なごみさん、丹羽悠月さん、中易桜花さん、吉田夏子さんからは、広告クリエイティブの現場における生成 AI 導入後の変化について紹介があり、発想支援や作業効率化といった利点がある一方で、オリジナリティや最終的な判断は人間に委ねられている現状が示された。また今後の課題として、AI の出力を評価・取捨選択する判断軸を若手がどのように身につけていくかが挙げられた。続いて、同志社大学藤本ゼミの林颯太郎さんからは学術出版社を対象とした調査について報告があり、業務効率化への期待とともに、誤情報、著作権、情報漏えいといったリスクへの強い懸念が示された。特に、編集者の専門性や責任が問われる業務については、AI への全面的な依存は難しく、活用範囲を明確に区別する必要性が示唆された。さらに、東京大学公共政策大学院の西山ゆうなさんからは、東京大学の江間准教授の授業で大学院生が作成した高校生向け AI リテラシー教材の開発・改良に関する取り組みが紹介され、ケーススタディ形式を通じて倫理的課題や主体性を実践的に学ばせる試みと、教育現場への実装に向けた課題が共有された。

続く後半では、参加学生が 3~4 人程度の 8 グループに分かれ、ブレイクアウトセッションを 2 回実施した。セッションに先立ち、参加学生は事前に自身の調査内容を簡潔にまとめた資料を作成し、「自身の調査内容の紹介」と「調査を進める中で生じた問題意識や気づき」を共通テーマとして意見交換した。セッション終了後には各グループの議論内容が全体で共有され、調査分野や立場の異なる学生の視点が紹介された。全体共有では、AI 活用による業務効率化と人間の判断力・創造性と

の関係、プライバシーや倫理的課題、AI に対する受け止め方の違いなど、多様な論点が提示された。特に、生成 AI の利便性が評価される一方で、出力への過度な依存が思考の画一化やオリジナリティの低下につながるのではないかという懸念が複数のグループから示された。また、プライバシー保護や情報管理、著作権への配慮が不可欠であるとの指摘とともに、現場レベルでのルール整備や有料プランの活用といった対応が進められている状況も共有された。さらに、AI に対する評価や受け止め方が、利用者の経験や世代、業務内容によって異なる点や、設計・導入段階における利用者視点の重要性についても意見が交わされた。

最後に、参加した指導教員から本日の内容を振り返るコメントが寄せられた。調査分野や対象の異なる学生同士が意見を交わし、国内コミュニティの交流を深めることで視野を広げる機会となった点が評価されたほか、学生が他者の問題意識に触れることで自身の研究や問いを見直す契機となっていることが指摘された。また、AI をめぐる議論において、技術的側面にとどまらず、倫理的・社会的影響について学生自身が主体的に考察している点が注目に値するとの意見が示された。以上の議論を踏まえ、原山優子センター長より、学生の主体的な取組への期待を述べ、閉会した。



全体集合写真（一部）

（以上）